<翻　訳>

ヨハネス・パウリ：冗談とまじめ（7）

Frühneuhochdeutsch 研究会訳
（代表　森　　昌弘）

ここに翻訳したのは1522年刊行のJohannes Pauli: Schimpf und Ernst第254話—第302話である（第253話までは『中京大学教養論叢』第30巻第4号，第31巻第3号，第32巻第2号，第32巻4号，第33巻第2号，4号に所載）。使用テキストは1924年刊のJohannes Bolte編（リプリント版1972年）を用い，適宜H. Österleyの版，その他を参照した。聖書に関しては『聖書新共同訳』（日本聖書協会1987年刊）に拠った。パウリの聖書の引用はほとんどすべてラテン語で，時とすると現今の聖書に一致しない場合，あるいは多少記憶違いと思われる箇所もある。それ故彼自身のドイツ語訳と重複する場合も，異同を明らかにするために，煩雑にはなるがすべてラテン語を添えて訳してある。聖書以外のラテン語も同じように扱った。

この翻訳は，Frühneuhochdeutsch研究会のメンバーが分担して訳したものを，最後に共同で検討修正したものである（訳の分担表は下記）。1993年7月現在のメンバー氏名はつぎの通りである。青木一行（名城大），大沢峯雄（名大名誉教授），木野茂（保健衛生大），工藤康弘（三重大），精園修三（中京大），中条宗助（名大名誉教授），中山淳子（竜谷大），橋本忠欣（福井大），森昌弘（中京大），山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順）。

分担表

第254話—第257話	森	第279話—第283話	青木
第258話—第260話	中条	第284話—第286話	大沢
第261話—第263話	橋本	第287話—第290話	精園
第264話—第269話	森	第291話—第298話	木野

第270話—第278話　山田　　第299話—第302話　精園

第二十三章　怒りと怒りからの短気について

第二百五十四話　まじめ

ペトラルカの言葉：Male cuncta ministrat impetus.
（乱暴はすべてを悪く処する）[1]

フランシスコ・ペトラルカはこう言っています。Male cuncta ministrat impetus etc.（乱暴はすべてを悪く処する。云々。）良いことであろうと悪いことであろうと，どんな仕事でも，慌てると巧く行きません。急いでやると，きっと多くの見落としをします。急いで祈れば，言葉は半分にならざるを得ません。カトーは言っています。Ira impedit, quod non potest cognoscere verum.（怒りは，真実を識別し得ざるが故に，妨げとなる。）ですからせっかちな人は，ろばに乗るようにして下さい。

第二百五十五話　まじめ

聖マルチンが「急ぐと着かない」と言ったこと

聖マルチンの話ですが，ある時彼が二，三の司祭とパリから出かけました。すると，ワインを重そうに積んだ馬車に出会いました。その御者はパリに一度も行ったことがなく，パリが近いのか遠いのか知らなかったので，彼らに尋ねました。「皆さん，パリに今日のうちに着けるでしょうか。」夕方近くでした。聖マルチンは言いました。「ゆっくり行けば，多分着けるでしょう。急いだら着けないでしょう。」御者は腹を立て，馬を追い立てて急ごうとして言いました。「見たところ，坊さんたちはワインで酔っぱらっているんだ。ゆっくり行くよりも急いで走って，着けないと言うのかね。」こうして急いだので，車輪が壊れ，別の車輪を取りに行かねばならなくなり，その日のうちにパリに着きませんでした。それで御者は，自分に言われたことが本当のことだと知りました。

1　このラテン語は，本来 Statius の Thebais にある言葉である。

「せいては事を仕損ずる」と言いますし，またこうも言われます。「せっぱ詰まれば巧くはいかぬ。急いで鍵を開けようとすれば，鍵穴は見つからない。」これは，せっかちについて言われているのです。

第二百五十六話　まじめ
オットー皇帝が復活祭にかっとなったこと

オットー皇帝のことで，こういう話があります。皇帝は復活祭に，諸侯や顧問官たちの宴会の用意をさせました。人々が席に着く前に，食事がテーブルに置かれました。その場に，ある領主の子供がおりました。可愛らしい男の子で，父の領主が連れて来ていたのでした。そういう時に無邪気な子供がやるように，その子は皿に手を伸ばして，中の料理を食べました。そのことに料理を運んでいた人が腹を立て，子供の首を拳で叩いたので，その子は床に倒れました。それで，子供を任されていた教育掛かりの先生が腹を立て，直ちに食事を運んでいる男を刺しました。皇帝は，この男を捕らえて首をはねるように命じ，自ら彼に摑みかかりますと，この男は皇帝を摑んで床に投げつけ，皇帝を絞め殺そうとしました。しかしやっと人々が皇帝を助けにかけ寄りました。この男は捕らえられ，首を切り落とされようとしましたが，オットー皇帝は言いました。「いや，ならぬ。お前たちは彼に何もしてはならぬ。神がこのようなことを私に課されたのだ。当然のことながら私は，今日の復活祭のことを大事にせねばならなかった。」そして彼を自由に立ち去らせました。このことでは，皇帝が思案して悟るまで，性急で気短な行為が次々に続いたのでした。

第二百五十七話　まじめ
罪もない犬を殺したこと

一人の貴族がおりました。彼は一匹の猟犬，グレーハウンドを飼っていましたが，その犬は彼のお気に入りで，いくら金を貰っても手放すことはなかったでしょう。ある時彼が部屋に入って行くと，彼の子供だけがゆり籠の中におり，その犬以外には誰もそばにはいませんでした。その間に，一匹の蛇が壁の中からはい出て子供を殺し，犬が死んだ子供の復讐をし，蛇をかみ殺すということが起こっていたのでした。この貴族は犬以外は誰

もそこでは見なかったし，蛇はゆり籠の下にはい込んで死んでいたので，事情が分からず，犬が子供をかみ殺したと思い，かっとなって怒りに任せて，その罪もない犬を刀で切り殺しました。しかし蛇が死んでいるのを見いだし，犬が死者のために復讐をし，自分が罪もない犬に正しくないことを行ったということ，蛇が殺人をし，犬が復讐をしたということが分かりました。この貴族は非常に後悔の念に落ち入り，心が満たされず，妻の同意もあり，聖ベネディクト修道会に入り，神に仕えました。

それでこのことが起こった町では，重大なことはすぐに行ってはならない，そういう時にはそれについて，市参事会で三度考えて相談するということが決められました。テオドシウス皇帝がかっとなって多くの血を流したために，聖アンブロシウスは皇帝を破門しましたが，別の人々は，この皇帝のように何事も急いでやってはならない，少なくとも二十四の文字を順々に数えなければならないと決めました。聖アンブロシウス伝を読んで下さい。

一人の人間がこの教えを肝に銘じ，前もって十分考えたのでなければ，自分自身の問題では何も行わないというのは非常によいことでしょう。快楽を思いつくと，急いで走って行って，その快楽に時を過ごすようにしてはならないのです。an esset licitum et expediens.（それが許され役に立つかどうか），それが当然至極でふさわしく正しいことであるかどうかを，予め見なければならないのです。そうそうしないとすぐ後に続いて，良心と後悔の呵責の念に苛まれることになるのです。

第二百五十八話　まじめ
刑吏が四人を殺し，自らも処刑されたこと

これはザクセンの小さな町で，つい此の頃千五百年に起こったことで，この事件は立派な人々の前で語られる一つの教訓にされています。

この町に一人の商人がいましたが，彼は見本市に出かけて，家は妻と娘と女中に任せていました。刑吏または首切り役人は，その家をじっと窺っていましたが，彼はある日の夕方，その家の一つの窓が地下室に通じているのを見て，その窓からピッケルを投げ込み，ついで自分も窓から地下室へ降りて，夜が更けるまでその中に隠れていました。主婦は女中に，「お前

地下へ行ってワインを一マース[1]持ってきておくれ。寝酒に頂いて休むとしましょう」と，言いました。女中は鍵を取り，灯りと器をもって飲み物を持ってこようとしたのですが，その時悪人が樽の背後から飛び出し，彼女を打ち殺し息の根を止めました。女中が一向に返ってくる気配がなかったので，母が娘に，「お前，下へ行って，姐やがいつ頃帰ってくるか見ておいで」と，言いました。娘は地下室へ急ぎ，女中に大声で呼びかけましたが，刑吏はこの娘も惨殺しました。二人とも帰って来る様子もなかったので，主婦は地下室へ降りて行きました。刑吏は主婦も殺して，三人とも樽の後ろの地面に余り深くなく埋めて，それから灯りを持って上へ上がり，壁にかかっていた鍵を見つけ，机や簞笥すべてに当たって見て，銀器や宝石貴金属と思われるものを取り出し，そしてその夜のうちに三回ほど家へ入ったり出たりしました。其処に大金がある筈はありませんでした。商人どもは商売に金が必要だからです。

この家がしまったままだったので，隣人たちはどうしたんだろうとつぶやき，また住人が恐らく引っ越したのだろうと思って，その家の世話をする者はなかったのです。それからおよそ三ヶ月後，商人が帰って来て，自分の家が閉ざされているのを見て戸口を叩きました。人々は商人に，この家の人々を見失ってしまったと告げました。その商人は家の中へ入ろうとせずに，町の役人の前へ出頭しました。そこでお偉方は，彼に六名の人をつけて，どんなことが起こったのか調査しました。一同が家の中へは行ってみると，家はひどく荒らされていました。更に地下室に進むと，土が覆いかぶせられた穴を見つけました。皆でその穴を掘り起こして，三人の女が横に並んで埋められているのが見つかりました。大変悲しい出来事で，殺人者は誰だか分かりませんでした。

しばらくの間こんな事態が続き，誰もが自分なりの考えを述べました。例の刑吏がある広場で職人たちの中にいて，「あの方がわしに任せてくれたら，わしが人殺しを見つけるだろう」と，言いました。職人たちがこのことを役人に告げると，その刑吏は呼びつけられて，その事件について知ってることを質問されました。「あの男自身の他に，誰があんなことをし

1　Maßは約1リットル。

たでしょう。彼奴は女房と不仲でした。彼に訊ねて下さい。おそらく白状するでしょう」と言いました。その善良で信心深い商人は捕らえられ，自分がやったと白状したので，車裂きの刑に処せられました。

それから間もなく，この刑吏は賭をして有り金全部すってしまいました。そこで彼は一ダースの銀杯を持って，ユダヤ人の店へやって来て，これを担保に二十グルデン貸してくれ，すぐまた請け出すからと言いました。このユダヤ人は金を貸しましたが，杯についた印を見て悟ることがあったのです。というのは，以前彼はあの車裂きに処せられた商人に，その杯をかたに金を貸したことがあったからです。ユダヤ人は町長の許へ行き，処刑された商人の銀器が，ある職人によって自分の店で二十グルデンで質入れされましたが，自分はその職人を知りませんし，誰であるかも分かりませんと語りました。町長は，「その職人が質を請け出そうとしたら，知らせてほしい」と言いました。彼が逮捕された時，それは例の刑吏だったのです。彼は，自分が信心深いあの男を扱った通りに取り扱われて，自分がやったと白状しました。刑吏にどんな死に方をさせたものかという相談が十分なされるまで，この刑吏は殆ど二週間獄中に放り込まれていました。当局と参事会の意見は一致し，そして板の上に裸で縛り付けられ，山のような炭と真っ赤に焼けた火ばさみがそこにありました。居合わせたものは誰も，老いも若きも，彼の肉体から一切れずつ肉片を裂かねばなりませんでした。この人殺しは引き裂かれて，一枚の銀貨の幅ほどの肉片もその身体に残りませんでした。

ここで何を書いたらよいのでしょうか。当然のことながら，彼ら二人を対決させるべきではなかったのでしょうか。善人が敬虔な男を告発すれば，その二人は対決させられます。生涯信心深く立派だと思われた人を，悪者が告発すれば，尚一層ひどいことになるでしょう。誰かの称賛の言葉とその立派な名前で，あのような即決裁判を防げないでしょうか。ある皇帝がある騎士にやったようには，裁判官どもはやらないでしょう。

第二百五十九話　まじめ
騎士が救済されたこと

ある皇帝が敵を相手に戦い，一頭の馬がその主人である騎士から逃げま

した。それで騎士は，敵中深く入りすぎて捕らえられました。皇帝方の軍が再び帰還した時，この騎士のことで協議が行われて，彼に好意をいだかなかった数名の者が言いました。「あの騎士は敵方に通じていた。あれは馴れ合いの事件だ。」皇帝が皆の者から意見を求められて，「あの騎士は未だ曾ってあのような目に遭ったことはないかどうか，以前にはどんな身の処し方をしたのか」と，尋ねました。他の者たちは，「いや，あの方はいつも騎士らしく勇敢で，立派に振る舞っておられました」と，言いました。そこで皇帝は，「ではこれからも，正にその通りに彼を信頼してやれ」と言いました。

この騎士は名声を博しました。すべての裁判所に，Audiatur altera pars.（他方の側も聴取さるべきなり。）と書いてあるのは，理由のないことではないのです。

第二十四章　怠惰について

第二百六十話　冗談
早朝ミサに汗をかいた僧侶のこと

ある修道院に，全くミサに出たがらなかった一人の修道士がいました。という訳は，朝のミサの時刻になると彼は汗をかき，それを拭おうともせず，そのまま汗にまみれて横になったままで，もっとよくなるだろうと思っていました。ある時，大きな祝祭がありましたが，その僧はミサに出ませんでした。そこで院長が灯りを持って，彼が病気かどうかを見ようとしました。院長がその修道士のベッドに近づくと，彼が汗をかいているのが見え，それにベッドの下に何かざわめく音が聞こえました。院長がのぞいて見ると，ベッドの下に二匹の猿の姿をした悪魔が見えました。「お前たちはそこで何をしているのだ」と，院長が聞きました。「わしたちは，この坊さんが汗をかいて寝過ごして，ミサに遅れるように炭火を起こしているんです」と，悪魔が答えました。こんな次第で修道士はすっくと起き上がり，汗の所為で寝過ごしてミサに遅れることを，これからはもうすまいと思っていました。そしてその後は，汗をかいて寝たままだった以前よりも，起床した時一層元気になったのが分かったのです。

次のようなのもあります。修道士たちやその他の人々ですが，それらの人々は，真夜中に起きて節度ある生活をしています。しかしたらふく食べて一晩中羽根布団の上に横たわり，昼ともなると二，三回の宴を張り，夜の十時になると漸くベーコンのスープを彼らに作って貰わなければならず，みんなが小昼を取ろうとする頃まで朝寝する者たちよりは，丈夫で長生きします。彼らが貴族なら，領主が朝方寝足りて，その不身持ちと食道楽に飽きてしまうまで，司祭はミサをあげてはいけないのです。そういうわけで，神も彼らと全教区民を待たざるを得ないのです。ところでミサでの怠惰は，何人にもふさわしくないけれども，修道士たちは怠けたり，ぐずぐずしたり，投げやりであってはいけないのです。倦むことなく速やかに飛び去るすべての鳥や，昼も夜もその歌声で神を称える，小夜啼鳥を手本にして貰いたいのです。毎夜起きていた，聖なるカール大帝の伝記を読みなさい。ダビデも同様です。Psal. 118. Media bocte surgebam.（詩編第百十八章　真夜中私たちは起きていた。）汝自らを知りなさい，怠惰から身を解き放しなさい。

第二百六十一話　冗談
国の相続がかかった三人の怠け息子のこと

ある王様に三人の息子がいました。息を引き取ろうとしたとき，王は息子たちを呼び集めて言いました。「お前たちの中で一番の怠け者に，国の統治を任せることにしよう。」すると息子の一人が言いました。「父上，それは私のものです。私は大変な怠け者で，横になって眠ろうとしているとき，私の目の中に滴が入ります。それでも怠け者のあまり目を閉じないで，眠ってしまいます。」もう一人は言いました。「それは私のものです。私は火のところに足を投げ出して横になっているとき，足を引き寄せるよりは火傷するままにするでしょう。」三人目は言いました。「それは私のものです。私は大変な怠け者で，首に綱をつけて吊されようとしており，手にはそれを斬るナイフを持っていても，それでも綱を斬るよりは吊されるままにすることでしょう。」――私たちはこの三人のことを悪く言うけれど，私たちは，この者たちよりも，もっと怠惰なのです。

多くの人たちの罪を犯す愛らしい目や，ものほしげな顔に，そして悪い

ことを考えている心の目に滴が落ちます。それでも自分の直面している災いに目を閉じているものです。

二番目のことですが。悪い仲間に欲望という足を突っ込んでいて，永遠に，熱い目をしている人たちが何と多いことでしょう。それでも彼らは欲望を引っ込めないのです。

三番目の人たちを悪魔は，懺悔をさせるために恥という綱をつけて，地獄の絞首台に連れて行きます。この人たちは手に懺悔というナイフを持っていて，懺悔をし，自分自身を救済することもできるのですよ。しかしその人たちはそれをしようとしません。だから当然こういう三種の人たちは，全員地獄の国がふさわしいのです。このことに心しなさい。

第二百六十二話　まじめ
畑を耕そうとしなかった男のこと

天国に昇ることを願った修道僧がいました。僧は老修道僧のところへ行って言いました。「老師様，私はもう一度還俗したいのです。私のお勤めをするには沢山しなければなりません。私はそれをすべてすることはできません。それは私にはむずかしすぎます。」老師は言いました。「そうではない。あなたはかって一人の息子がしたようにするのだ。ある父親に一人の息子がいて，父はその息子に言ったものだ。『息子よ。鍬を持って行って，畑を耕しなさい。それからその中に，何かいいものを蒔くことにしよう。』息子は出かけて行って畑が大きいのを見て，自分に言ったものだ。『どうしてお前一人でその畑が耕せようか。』それで息子は横になり，帰る時になるまで眠った。三，四日こんなことをして，何もしなかった。ある時父親は言ったものだ。『お前がどんなに働いたのか見に行かねばならない。』行ってみると，まだ息子は始めてはいなかった。そこで息子を叱ったものだ。息子は言ったものだ。『お父さん，どうしてこんな畑を私一人で耕せましょう。』父親は言ったものだ。『息子よ，そういうものではない。毎日これまでずっとそうしてきた以上のことはするな。そうすれば長続きしよう。』息子はそのようにした。数日して土地に作物が生え，増えていくのを見て楽しくなり，二，三日でその畑を耕してしまった。あなたもこうするのだ。毎日少しずつ直し，毎日増やしなさい。そうすれば楽しくなって，

日毎にお勤めが楽になろう。」修道僧はそのようにし，実際にそうなりました。

私たちは自分で国や信仰や掟に余りにも重荷を負わせ過ぎると，聖アウグスチヌスは嘆いて，それは悪い制度だ，と言いました。ここに言われている理由であります。もしアウグスチヌスが今はじめてこの世に生まれたとしたら，どんなことを言うでしょう。アウグスチヌスがこんなことを言ってから，もう千百年になります。その後，命令，法王の告示，ボニファチウス八世教令集，クレメンス教令集，付属書，そして多数の法，教理法令集，司教区法令，聖歌隊の慣習，降待節が生まれました。くるみの殻が余り沢山あるので，神の掟である核心を，その中に見い出すことができないのです。さらにこうした殻は私たち自身にそれだけ多くの罠を仕掛けることになります。何かしようとすると，罠が見えて，何をしてよいか分からなくなるのです。昔の正しい信仰に踏みとどまり，新しい予言に迷わないことです。云々。

第二百六十三話　冗談
怠け者のクンツのこと

貴族がいて，自分の罪を懺悔するためにローマへ馬で行く計画を立てました。貴族にはクンツという下男がいて，この者を連れて行こうと思いました。夏でしたので，いつも早朝や，晩遅く涼しいときに旅をし，一番暑い盛りには静かに横になっていようと計画しました。夕方出かけ，およそ三マイル行って食事をし，酒を飲みました。酒は大変美味しくて，十時になるまで酒を飲み続けました。貴族は下男に言いました。「私たちは寝るのが大変遅くなった。朝早く馬に飼葉をやり，鞍をつけるように気を配ってくれ，計画通り朝涼しいうちに旅をするのだ。」下男は言いました。「はい，旦那様，ご心配なさらないでください。私はうんと早く起きるつもりです。」

亭主は二人を宿の裏手の部屋に寝かせました。それで二人には何の物音も聞こえませんでした。二人は眠りました。貴族が一寝入りしたとき，下男を呼んで言いました。「クンツ，起きよ，そして馬に食わせろ。」下男は言いました。「旦那様，まだ夜中にもなっていません。私たちはいま寝たと

ころです。」彼ら二人は二時間眠りました。貴族はまた下男を呼びました。下男は起き上がり，窓のところへ行き，戸棚の戸を開け，それが窓の戸だと思いました。そして戸棚の中の四隅を見て，下男は言いました。「旦那様，貴方は落ち着きのないお人だ。修道院の牢のようにまだ真っ暗です。何も見えないように指で片目をえぐり出したら良かろう。」彼らは一時間眠りました。貴族はまた下男を呼びました。彼ら二人で真っ暗な戸棚の中を見ました。夜は明けていませんでした。亭主がやって来て鎧戸を開けるまで，こんなことを続けていました。太陽は山のずっと上まで昇り，およそ十時になっていました。貴族は怒って，馬に鞍をつけるよう命じて，発とうとしました。下男は言いました。「旦那様，その前に朝飯を取りましょう。馬も食べます。」そこで彼らは朝飯を食べてしまうと，貴族は出発しようと思いました。「今は暑い盛りです。馬を駄目にしてしまいます。今は昼時で，お坊様たちは眠るときです。」こうして二人は晩まで居続けてから，馬に乗り，家に帰りました。貴族は怠け者のクンツとでは駄目だということが分かりました。こうして彼はローマへ行きませんでした。

宗教的には，貴族は理性であり，魂であり，だらしのないクンツはあなたの肉体です。戸棚は誤った確信であることが彼には分かっているのです。戸棚にはあなたを確かめる四隅があります。その一つは神の慈悲であり，いま一つは「他の人たちもそうする。特に学者たちが。彼らは愚か者ではない。」三つ目は「あなたは良い体質です。あなたの父上は確か百才になられた。」四つ目は「当てにして，死にあたって改宗しようと思う。」あなたの理性はどんなにしばしば過ちを犯すことでしょう，理性は四つのうちの一つを当てにしたり，四つ全てを当てにして悔い改めることを，明日，明日と遅らせます。Cras, cras! Semper cras et nnquam hodie.（明日，明日。いつも明日で決して今日ではない。）キリストは若者に言われた。「Luc. 5. Tibi dico, surge.（ルカによる福音書，第五章　お前に告げる。起きなさい。）起きなさい，若者よ。」パウロは言いました。「Rom. 13. Hora est iam de somno surgere.（ローマの信徒への手紙　第十三章　あなたが眠りからさめる時がきています。）」

第二十五章　死を思い浮かべること

第二百六十四話　冗談
ベッドへ行くことと船に乗ること

フランシスコ・ペトラルカが書いている話です。ある市民の息子が旅行していた時，一人の船頭と道連れになるということがありました。二人は色々なことを話しました。フランシスコ・ペトラルカは書いています。「Comes facundus in via pro vehicuro est.（饒舌の道連れは道中において，馬車の代わりとなる。）」[1] 話が両親のことになって船頭は言いました。「今年わしの親父は溺れて死んだ。わしのお祖父さんも溺れて死んで五年になる。」この息子が言いました。「あなたの曾祖父と高祖父 avus, pro-avus, attavus（祖父，曾祖父，祖先）は，どんな死に方でしたか。」船頭が言いました。「みんな溺死でした。」市民の息子が言いました。「私でしたら，いつまでも船頭をしたくはありませんね。船に乗っていると，溺れはしないかと恐ろしくなりませんか。」船頭は言いました。「あなたのお父さんはどんな風に死にましたか。」「彼は勿論ベッドで死にました。祖父も，曾祖父も，先祖すべてベッドで亡くなりました。」すると船頭は言いました。「それならベッドへ行くと，そこで死ぬのではないかと，恐ろしくなりませんか。」

これは賢い質問でした。それというのも私たちは，この世で確かなものを何一つ持っていないからです。死の時間も，場所も，方法も知らないからです。ボナベンツラは言っています。「多くの人は七十年生きようと思うが，やっと七十日年を取るだけである。多くの人はベッドで死のうと思うが，事故死するかも知れないのである。」賢者たちも私たちに同様に語っています。「死より確かなものは何一つない。死の時間より確かでないものも何一つない。」

1　このラテン語は，本来 Publilius Syrus にある言葉である。

第二百六十五話　まじめ
求愛した男を，死にかかっている人のところに送った婦人のこと

ある時一人の若い職人が，ある女性に求愛しました。彼が長い間愛を求め続けたので，彼女が言いました。「お願いがあります。あなたが一年間それを私のためにやって下さったら，あなたの思い通りになりましょう。」彼が何かと尋ねると，婦人は言いました。「あなたは一年の間，死にかかっている人がいると聞いたら出かけて行って，今はの際に人々がどのように振舞うかを見て下さい。」職人は，「そうします」と答えました。一年が過ぎた時，この職人が再び婦人の所にやって来て言いました，「奥さん，あなたは今，恐らく私の思っていることをやっています。なぜなら，誠実に清らかに生きることが，私の意志だからです。そのことを，あなたが私に受けさせた授業で学びました。」

これは真実です。臨終を正しく観察して，人間がベッドで死ぬのを見ようとする人は，自惚れ，貪欲，嫉妬，不純というものを避けたり，押さえたりすることを十分学ぶことでしょう。

第二百六十六話　まじめ
三つのことを恐れた教父のこと

ヘリアスという名の教父がいました。彼は語っています。「三つのことを私は恐れている。第一は，私の霊が肉体から離れる時のことで，第二は，私の霊が神の前に進まねばならない時のことである。第三は，私に下されるであろう判決である。というのは，それが良い判決であるか，悪い判決であるか分からないからである。」準備をして下さい。

第二百六十七話　まじめ
死神がある人に三人の使者を送ったこと

ある時，死神と契約した人がいました。Pepegimus fedus cum morte. Esaie. 28（私たちは死と契約した。イザヤ書　28.）死神は，三人か四人の使者を送ってからでなければ，この人を連れに来てはならないというのです。彼が病気になりました。医者は彼にこう警告しました。「魂の準備をし

なさい。あなたは尿と脈が具合が悪く，危ないかも知れません。」二，三日経って彼自身が言いました。「ワインがもう旨くない。食事をする気がしない。もう食物を腹にためておくことが出来ない。いつも吐いてしまう。」その後間もなく，死神がやって来て言いました。「さあ，お前はわしと一緒に行かねばならぬ。わしがやって来たんだ。」彼は言いました。「まだ時間が来ていない。約束したように，お前はまだ一人も私に使者を送って来ない。」死神は言いました。「わしはお前に伝えた。最初は医者で，お前に尿と脈の具合いが悪いといった。ワインが旨くなくなった時が二番目の使者だ。食物を戻した時が第三の使者だ。だからわしと一緒に来い。死ぬ時になったのだ。時間が来たのだ。」

こういう使者は私たちに沢山やって来ますが，死神の使者と考えようとしません。心して下さい。

第二百六十八話　まじめ

悪魔が連れて行こうとする前に，その人に三人の使者を送ったこと

昔ある人が貧しい日々を送るようになって，悪魔に身を委ねました。しかし三年の間にあらかじめ三度警告をするという条件をつけました。悪魔は彼を金持ちにしましたが，その後人間の姿をして，金持ちにした男に野原で近づいて，彼に言いました。「どうして頭がそんなに白いのだ。」この男は怒って，悪魔を殴ろうとしました。次の年に，悪魔はまた野原で彼に近づいて，言いました。「どうしてそんなに背中を丸めて歩くのだ。背筋を伸ばせ。」三年目にまた近づいて言いました。「どうしてそんなに病気になるのだ。」これが第三の警告でしたが，彼にはそれが分かりませんでした。丁度何人かの騎士がある人に警告するように，警告が行われたのです。騎士は誰かを捕虜とした時には，最初にその人に断りの通告をしているのです。このように悪魔は，この人を摑まえて連れて行きました。この人もこう言ったかも知れません。「ええ，お前はおれに使者を一度も送らなかった。」

神は私たちにこのような使者を送られて，私たちは毎日他の人々が死ぬのを見ているのですが，その私たちの多くはこんな状態です。にも拘わらず私たちは，死すべきものであるということを，ほとんど信じないのです。

私たちが他の人々の死を手本としないのですから，別の人々が私たちを手本とすることでしょう。さてその様な使者が来て人生を終える人が沢山いるのですが，年老いた人には極めて確実に死神の使者が来ます。それが年令というものです。にもかわらず人々は，死神も別の使者も見ていないのです。それで彼らは地獄へ行きます。地獄では炎が窓から吹き出ており，林檎が煖炉の上で焼かれているのです。

第二百六十九話　まじめ
日の沈む方向に立った王のこと

昔三人兄弟の王子がいましたが，それぞれが王になろうとしました。それで一緒に裁判官の前に出ました。裁判官は，三人全てが朝早く野に行くように命じ，真っ先に太陽が昇るのを見たものが王になるよう判決を下しました。三人は朝早く野に出かけ，二人は太陽の昇る方に向かって立ちました。三人目王子は日の沈む方に向かって立ちました。この王子は，他の王子よりも三十分早く，向かい合っている山に太陽が輝くのを見ました。それで彼が父に代わって王になりました。

このように人間が自分の日没と死を肝に命ずるならば，謙虚になり，天国の王となることでしょう。しかし私たちは自分の生まれや家柄のことだけに目を向けています。賢者は言っています。Ecclesiasti. 7. Memorare.（シラ書［集会の書］第七章　心に留めよ。）「なんじの最後のことを思い起こしなさい。そうすれば罪を犯すことはないでしょう。」

第二十六章　幾人かの人が臨終の折りに，普段のように振舞ったこと

第二百七十話　冗談
十字架を側に置きたがらなかった男のこと

ある時一人の男が病気になりました。それで，この男のもとに聖なる秘蹟と死者の十字架が運ばれました。十字架には銅製の小さなキリスト像が付いていました。すると病人が叫びました。「そいつを俺の家から出してくれ。俺はそいつをこの家の中に置きたくないし，そいつがこの家の中にいるうちは，何も良いことをしないぞ。」病人が誰のことを言っているのか誰

にもわからず，皆は誰を外に出せというのかと病人に尋ねました。病人は言いました。「十字架にくっついている奴だ。そいつを俺は家の中に置いておきたくないんだ。」皆は言いました。「何故だね。」病人は言いました。「こういう訳さ，そいつはある時教会で俺の腕を一本折ったんだ。そして，そいつが俺の上に倒れたんで，薬代が沢山かかったのさ。」皆は言いました。「それは同じ人じゃないさ。もう一人の人はもっと大きいし，この人があんたの腕を折ったんじゃないよ。」病人は言いました。「こいつがそれをしなかったとしても，こいつはあの野郎の息子だ。全く同じことだ。」

同様にあなたは，もしある人に敵対していれば，その人に属する全ての人々をも憎むという人たちを，まだ見かけます。またそういう人たちは，もし自分たちがある人を憎んでいたら，自分たちの親戚も皆，その人を憎むべきであると思っているのです。妬みと過度の無知に用心しなさい。

第二百七十一話　冗談
十字架像に接吻した男のこと

ある時一人の大酒飲みが飲み過ぎたか，そうでなくても病気でした。それでこの人のもとへ十字架が運ばれました。大酒飲みは十字架を胸に押し当てて，接吻し，誰もがそのことによって改心させられた程の信心を示しました。大酒飲みは死んで，三十日目に仲間の一人のもとに現れました。仲間は死者に，どんな具合いで，どんな境遇にいるのかと尋ねました。死者は言いました。「俺は永遠に見捨てられている。そして，それはほとんどが俺の飲酒のせいで起こったことなんだ。」仲間が言いました。「どうしてそんなことがあり得るんだね。だってお前さんは十字架でもって，あんなに大きな信心を示したじゃないか。」死者は言いました。「お前さんたちが俺に十字架をくれた時，俺はそれがワインの入った瓶だと思ったのさ。そしてそれは冷たかった。だからそれを胸に押し当てたのさ。」

同様に，私たちが昼間係わりあっていること，そのことを私たちは夜夢に見るものです。私たちは生きている間携わってきたことに，臨終の床でも係わるのです。ある者は酒を飲もうとし，もう一人は論争したがり，また三人目は狩りをしようとします。云々。自らのことに用心しなさい。

第二百七十二話　冗談
狩りをして，全ての犬の名を呼んだ男のこと

ある時一人の男が死にかけていましたが，この男は狩猟が大好きでした。それで男は全ての犬の名を呼びました。「クロは良く走る。シロも良く走る。だがアカは奴らに勝るな。」これがこの男の考えでした。この人は臨終の折りにもそれに係わりあっていたのです。同様の事が，犬っころ，すなわち小犬に対して，神に対するより以上の愛情を持っている貴婦人たちにも起こることでしょう。彼女たちは犬を説教に連れて行くので，犬が人々や説教師たちを不愉快にします。小犬どもは彼女たちの天使です。悪魔どもが犬の姿をして彼女たちをなめたり，接吻したりすることでしょう。そして，彼女たちが今犬にしているように，悪魔もまた彼女たちにすることでしょう。三種類の犬がいます。まず百姓犬，彼らは村で屋敷や家畜の番をします。これはまあよろしい。その次が猟犬で，彼らは役立つより以上に金がかかります。三番目は小犬で，彼らは暖炉の後ろでおならをし，鍋をなめる以外に何の役にも立ちません。このことは，若干の御婦人方にあてはまります。

第二百七十三話　まじめ
誰かが長持ちを取ろうとした時に，合図をした男のこと

貪欲な男がおりましたが，この男は高利貸しでした。男が死に臨んだとき，親戚の者たちがやって来て，男に神と懺悔と秘蹟について話しました。男は丸太のように寝転がって目を開けていました。一人が言いました。「私たちが言っていることがわかるかね。あんたは懺悔したいかね。私たちに頭か，目か，足かで合図だけでもしておくれ。」それは何の役にも立ちませんでした。男は分かったという合図はしませんでした。そこに一人の皮肉屋がいて，病人の周りに立っている人々に言いました。「誰か俺と賭けるかね。俺はこの人が合図するようにしてみせるぜ。」皆はこの男にそれをやってみるようにと言いました。そこで，この男は歩いて行って鍵を取り，まるで，病人の足元にある長持ちを開けようとするかのようにしました。その中に病人は金を持っていたのです。病人は誰かが自分の長持ちを取ろう

とするのに気付くや否や，合図をして，頭を持ち上げ，渋い顔をして，ブツブツ独り言を言いました。そこに病人の同業者が一人居合わせましたが，事の全てを見て，病人のことを恥しく思い，くるりと向きを変えて去って行きました。

よく理解して，このことに用心しなさい。

第二百七十四話　冗談
おしゃべりばかりして，祈ろうとしなかった男のこと

私は，自らの内に沢山の言葉を持っていた，ある弁舌家，または多弁家，あるいはおしゃべりについて読みます。この男が病気になりました。男は懺悔して秘蹟を受けた後も，横たわって減らず口を叩き，おしゃべりしていました。男の口はせきれいの尻尾のように，絶えず開いたり閉じたりしていました。そこに一人の婦人も居合わせていて，言いました。「ああ息子や，お前は神様を受け取ったのですよ。祈らなければならないのよ。主禱文をお言いなさい。」男は言いました。「母さん，僕は祈ると口が渇いてしまうんだよ。だから祈る時には，前もって何か飲んでいなければならないんだ。」しかし男はおしゃべりしても口は渇きませんでした。こうしてこの男は，自分にとって良いことを考慮に入れなかったのです。

第二百七十五話　冗談
聖油を塗ってもらって，金庫の心配をした男のこと

一人の貪欲な男が病気になりました。男はもう長いこと何も話さず，また何もわかりませんでした。司祭がやって来て，男に聖油を与えようとしました。司祭が男に塗油しようとした時，男はうまく話すことができて，言いました。「そこで私の金庫を取ろうとするのは誰だ。さあ，泥棒たちを追い出してくれ。」この男の心も，秘蹟というよりも，むしろ金庫の中にあったのです。

第二百七十六話　冗談
手に鍵を持っていた男のこと

ある時，別の男が病気になりました。男の右手に聖油を塗ろうとすると，

右手がありませんでした。司祭が言いました。「右手はどこにあるのですか。」男は言いました。「私の体の下です。その手に私は金のための鍵を持っているのです。」

第二百七十七話　まじめ
ひきがえるから一ペニヒ貨を受け取った男のこと

私はある病人について読みます。この病人が秘蹟を与えられることになった時，彼は口を開けようとしませんでした。それで，司祭はまた秘蹟を持って帰って行ってしまいました。こうして皆が病人の周りに立って悲しんでいると，ペニヒ貨を口にくわえた一匹のひきがえるが，隅から這い出してきました。誰もそのひきがえるに何もせず，皆がじっと見ていました。すると，ひきがえるはベッドの上の病人の所へ登って行き，病人の口にそのペニヒ貨をくわえさせました。そしてひきがえるは消えてしまいました。こうして病人はそのペニヒ貨で窒息してしまいました。

上述の全ての人々に，こう言うことができます。Act. 8. Pecunia tua tecum sit.（使徒行伝　第八章　お前の金は，お前と共に滅びるがよい。）「お前の金はお前と共に永遠の堕地獄にある。」Deutero. 32. Ubi sunt dii erum.（申命記　第三十二章　彼らの神はどこにいるのか。）彼らが頼みとした，彼らの神々はどこにいるのでしょう。今や，グルデン金貨が立ち上がって，彼らを助けに来るでしょうか。貪欲に用心しなさい。

第二百七十八話　まじめ
臨終の折りに十字架像を見ようとしなかった男のこと

私たちは，一人の貪欲で無慈悲な男について読みます。この男に秘蹟が運ばれ，懺悔をするように促された時，男はそれについて皆が言うことを，何一つ聞こうとしませんでした。聖なる十字架を示されても，男はそれを見ようとはせず，こう言いました。「神は私を顧慮しようとしないから，私も神を顧慮するつもりはない。というのは，私に借金をしていた貧しい男をも，私は顧慮しなかったのだから。」こうして男は絶望して死にました。あなたはここに留まり，悔い改めなさい。

第二十七章　魂について

第二百七十九話　冗談
魂を売った男のこと

ある時，気の置けぬ仲間うちで酒盛りがありました。そして勘定を払う段になって，そのうちの一人にお金の持ち合わせがありませんでした。男はほかの仲間に言いました。「この剣をかたに出すから，誰ぞ私に金を貸してくれませんか。」剣でも上着でも，それをかたに取って金を貸そうとする者はいませんでした。男は言いました。「それでは私の魂をかたに置くから，誰か私に勘定分を貸してくれませんか。」でもやっぱり貸してくれる人は現れませんでした。その時，「貴方が魂を売るつもりでしたら，私が引き受けてもいいですよ」と，応じた者がおりました。男は「いいですとも」と答えました。相手の男は聞きました。「どれほどの値で譲ってくれますか。」「安くお譲りしますとも。この場の私の勘定をちゃんと支払って，そのあとみんなでもう一度パーッとした気分になれるよう，別の席を設けて下されば。」相手の男はいいですよと言って，男のために勘定を払ってくれました。

自分の魂を譲り渡した男と，そしてその魂を買いうけた男がいると言う話は，村の領主の耳に達しました。領主は二人を罰してやろうと思い，彼らを呼び出し，第一の男に言いました。「なぜその方は自分の魂を売り渡してしまったのか。」男は答えました。「領主さま，こういう訳でございます。私は自分の魂がいずれ悪魔の持ち物になる事をよく存じているのでございます。悪魔に与えるよりはましだと思い，私は自分の仲間に魂を進呈しました。」領主はもう一人の男に聞きました。「なぜその方はこの者の魂を買ったのだ。」その男は言いました。「それはでございます，悪魔は一人の人間から一つの魂しか取ろうと致しません。それで私はこの人の魂を買いました。もし悪魔が私の魂を取ろうとしましたら，私は買い取ったこの魂を悪魔に差し出すつもりでございます。」これを聞いて，貴族はもはや語る言葉もありませんでした。

魂や宗教上の事柄を弄ぶのは宜しくありません。

第二百八十話　まじめ
悪魔が魂を買ったこと

ある時のこと，一座の仲間が互いに酒を傍らに，賭博をし，そして魂というものについて話し合いました。その席で一人が言いました。「坊さんの言うことに釣られて，この世の後にまた別の世があるんだとか，魂というものがあるんだなどと思いこむとは，わしらもなんという馬鹿だったんだろう。それはともかく，俺は勝負ですってんてんになっちまったんだ。誰か俺の魂を買ってくれないか。」誰一人その男の魂を買い取ろうとはしませんでした。この時一人の男がドアを開けて入ってくると，「皆さん何を話しているのですか」と，尋ねました。一座の者が説明すると，男は言いました。「私がその魂を買いましょう。」そして代金の一グルデンを出しました。魂を売った男はまた賭博をしました。さて一同の者が帰ろうとしたとき，買い手の男は言いました。「ねえ皆さん，馬を買うときは，その馬を引いていく手綱も一緒に買うものです。それが当たり前のことでしょう。」一同の者はその通りと答えました。すると実は悪魔であったこの商人は言いました。「私は魂を買いましたが，同時に馬ならその手綱ともいうべき人間の肉体をも買い取ったのです。」悪魔は身体と魂を摑んで，その場から離れ去りました。この時になって初めて，例の男は，この世の果てた後，また別の彼岸が存在する事に気付いたのでした。

このように，前後の事情を見通すことこそ，多くの人にとって肝要なのではありますまいか。

第二百八十一話　まじめ
自分の魂に財産を提供した男のこと

私たちは，一人のいかさま商人について読んだことがあります。その商人は病にかかりました。そしてもう助からないと悟りましたので，商人は自分の魂と語り合いました。こんな風にです。「愛する魂よ，お願いだ。どうぞ私から離れないでおくれ。私の周りに立っている皆さんのために。」病が進んだとき，商人は金貨の詰まった櫃を持って来るように命じました。そしてこれを自分の魂に見せて言いました。「この金貨は全部お前に遣る

から，私の所に居ておくれ。」病がさらに悪化したとき，商人は宝石や銀の器を手もとに持って来させ，言いました。「これらをそっくりお前に上げよう，私はそれ以上にもっと儲けるからいいのだ。私の許にとどまっておくれ。」ほどなくして死期が迫ったとき，商人はおのれの魂に向かって言いました。「私が仲間のことを話しても，お金を遺ると言っても，お前はここにとどまろうとはしない。ならばいっそのこと，永劫に安息も平安も与えない百千もの悪魔たちのところに行ってしまうがいい。」かくして商人は息絶え，自分の魂をその死の床において，悪魔に与えてしまったのであります。それも当然のこと，商人は生前魂を悪魔に委託し，高利貸しやいかさま商売をして，これを売り渡していたのであります。

このようにして財を成す人は，前例に鑑み回心すべきであります。この種の事はよくあったのですから。

第二十八章　悔悛と贖罪の業について，大鼠たちを喩えにここで一言

第二百八十二話　冗談
大鼠が悔悛したこと

大層な被害を与えた大鼠がおりました。が，寄る年波で良心の呵責が辛く思えてきましたので，生き方を改め，悔悛するため，どこぞの修道院に入ろうと思い立ち，出発しました。と，ある門口のところで，仲間の一匹が，釘で張りつけにされているのを見つけました。大鼠は聞きました。「お仲間，お前さんはそこで何をしているのですか。」「私は自分の罪を償っているのですよ。」大鼠は言いました。「この修道会は私には厳しすぎる。これでは辛抱できないな。」大鼠はさらに歩いて行きました。そこで，一匹の仲間が鼠罠に掛かっているのを見ました。大鼠はその者に言いました。「お仲間，お前さんはそこで何をしているのですか。」「私は自分の罪を償っているのですよ。」大鼠は言いました。「この修道会も私には厳しすぎるみたいだな。」大鼠はさらに歩いて行きました。そして一つの壁暖炉の中にやって来ました。そこには沢山のベーコンがぶら下がっていて，鼠たちがそのベーコンを上に下に走り回っていました。大鼠はその若者たちに尋ねました。「お仲間，お前さんたちはそこで何をしているのですか。」鼠たちは言

いました。「私たちは自分の罪を償っているのです。貴方も私たちの修道会に入りませんか。」大鼠は言いました。「なるほど，この修道会は気に入りました。ここで私も罪を償うことに致しましょう。」

私どもの場合もご同様であります。私たちの気にいるような修道会なぞありはしません。たとえば，大麦，豌豆，そらまめ，隠元豆などが一緒に煮込まれたゴッタ煮雑炊みたいな，混ぜ合わせ修道会があったら，これは私たちにお似合いかも知れません。たとえば跣足修道会の散歩とか，ドミニコ会の聖務日課とかのように，あらゆる修道会からなにかと取り集められれば，楽しいものになるでありましょう。

跣足修道会士たちははるばる巡礼をして，全世界を踏破します。ある者は多分，シュトラースブルクからベニスまで行き，ふたたびそこから戻って来るとのことですし，またある者はミラノからバーゼルに向かい，平帽子をそこで買って帰ってきます。ドミニコ会の聖務日課ときたら，復活祭でもひどく短いお祈りしかしません。他の会ならば十二の予言の書を持っているのに，彼らは六つしか持ちません。カルトジオ会の安息，ヨハネ騎士修道会の食事，ドイツ騎士団の魚菜そしてベネディクト会の巡礼杖などは，ひょっとすると八十グルデンの馬かも知れませんし，シトー会士の頭陀袋は，お金が一杯の道中財布ではないでしょうか。僧たちの着物といえば頭巾のついた柔らかな僧衣で，冬になれば彼らの唇を被うのです。

これは優雅な修道会であります。しかしもし私たちがこのような修道会で，そしてこのように結構な生活をしていて，なおかつ神の国に至らんと思うなら，あらゆる厳しい贖罪を果たしてきたフランシスコ会士，ドミニコ会士，ベネディクト会士，その他心正しい修道士たちは随分と愚かな人々であったと言えるでありましょう。でも，聖ヒエロニムスは，人々がこの世では腹を満たし，あの世では心を満たすことなどお認めにはならないのであります。

第二百八十三話　冗談

吊るして欲しい木が見つからなかったマルコルフのこと

ある時，一人の男が脱走の途中で捕らわれました。男は郷里に連れ戻され，法廷に立たされました。裁判官たちは，男を絞首刑に処すべきである，

ただし，どの木に吊るされたいかは男の選択に委ねるべきもの，それによって刑を執行するという判決を下しました。男は森の中に連れて行かれ，一本一本すべての木を示されましたが，どの木を見ても吊るして欲しいような気持ちになりませんでした。そこで男は再び郷里に連れてゆかれ，お偉方が男を吊るさせたのでした。

宗教の話に引き当ててみましょう。神父が私たちに与えようとする贖罪で，私たちの気に入るものなど，この世の中にありません。私たちは十字架に掛けられたくないし，贖罪という木に吊されたくもありません。私たちはみずからの過ちを贖罪したくもないし，そのゆえに苦しみたくもないのです。そのくせ永遠の命は得たいと思っているのです。この様な人々を神様は，地獄の絞首台に掛けられるのだということを銘記すべきであります。ですから，自分の罪過に対しては償いをしなければいけませんよ。

第二百八十四話　冗談とまじめ
くじゃくの尾を持つろばを買いたいと思う男のこと

一人の若い商人がおりました。フランクフルトの見本市へやって来ました。そして誰もが売買を終わって家へ帰ろうとする頃，まだ自分の買いたい物を探していました。何を探しているのかときかれて，商人は「おやじに言いつけられて，胴体がろばで，くじゃくの尾を持つ獣を探しているのさ」と言うと，「そんな獣は見つかりゃしないよ」と言われました。実際見つからなかったし，今でも見つかりはしません。

このように，悪い暮らしをしながら，幸せな最期を見出したいと思う人々，終生ろばのような暮らしをしながら，美しい最期をとげたいと思う人々は大ぜいおります。尾は獣の，鞍は馬の，蓋は壷の一部ではないと言うのです。バラムも言いました。(「民数記」第二十三章)「私の生は正しい人々の死のように死なねばならない。」[1] 立派に死にたいと思う者は，立

---

1 「民数記」第23章第10節に次のように出ている。
「バラムはこの託宣を述べた。
・　・　・　・　・　・
わたしは正しい人が死ぬように死に
わたしの終わりは彼らと同じようでありたい。」

派に生きなさい。良い生のあとに悪い死の来ることはめったにないのです。従って，良い死が悪い生のあとに来ることもめったにありません。くれぐれも気をつけなさい。

第二百八十五話　冗談
一つの欠陥ごとに一ペニヒの通行税を払う男のこと

一人の百姓がおりました。主人に仕え，立派に仕えていました。主人は百姓に言いました。「お礼に何か所望するがいい。何なりと叶えてやろう。」百姓は言いました。「だんな様，いよいよこの地で年の市が始まります。お願いでございますが，この町の市へ来て，身体にどこか一つ欠陥か病気のある者は，誰でも私に一ペニヒ払わねばならないようにして下さい。」主人は「よろしい」と言って，その手配をし，書面で約束しました。百姓は市門のわきに座って待っていました。すると，一人の男がやって来ました。男の首には疥癬ができていました。百姓は言いました。「お前さん，一ペニヒ払いなさい。」男は拒みました。そこで，百姓は男の首をつかむと，そこに大きいこぶがありました。百姓は言いました。「二ペニヒ払いなさい。」男はそれも拒みました。百姓は，片方の目まで深く被っている男の帽子をはぎ取って見ると，男は片目でした。そこで言いました。「さあ，三ペニヒ払いなさい。」男は拒みました。それで，百姓は男の財布をつかむと，財布はぼろぼろでした。そこで言いました。「四ペニヒ払いなさい。」男は拒みました。見ると，男はびっこで，その上せむしでした。そこで，百姓は男に，六ペニヒ払え，と言い，男も百姓に六ペニヒ払わねばなりませんでした。男は最初に一ペニヒ払おうとしなかったばかりに，あとで六ペニヒ払わねばならなかったのです。

このように，僅かの懺悔と贖罪でこの世で罪を晴らすことができるのに，それをしようとしないで，煉獄まで，あるいはひょっとすると，罪のために常時苦しまねばならぬ永劫の堕地獄まで，それを引き延ばしている人々が大ぜいおります。ですから，この世には恩寵の時が，あの世には裁きがあるのです。

第二百八十六話　まじめ
聴罪司祭，天使祝詞を五回課すること

ある跣足修道会士の修道院に一人の説教師がおりました。この人はある騎士の聴罪司祭でした。夏のある日，騎士が小昼のあとで庭へ散歩に行くと，一人の美しい遊女が庭へ入って来ました。要するに，二人は桑の木の下で取引に同意して，騎士はその女と不貞を働きました。その夜，騎士の妻は眠ったままで腕を振り回し，泣きわめいて，あられもない有様でした。夫は妻の脇腹を突いて起こし，言いました。「おい，どうしたんだ。そんなに腕を振り回したりして，どんな夢を見たんだ。これまで一度もそんなことをしなかったじゃないか。」妻は言いました。「あなた，こんな夢を見たの。あなたは庭に出ていた。すると，一人の男が抜き身の刀を持ってやって来て，桑の木の下にあなたがその人の奥さんと一緒にいるところを捕まえて，あなたに刀を突き刺した。それで，あんなに腕を振り回したのよ。」夫は言いました。「さあ，お休み。私がお前のそばにいるのは，よく分かるだろう。」しかし，騎士は，それがどういう刀であるか，よく分かっており，後悔と不快の思いに駆られて，夜の明けるのが待ち遠しいほどでした。

さて，夜が明けると，騎士はミサを聞き，そのあと教師でもある自分の聴罪司祭の所へ行き，罪を犯した庭の木の下へ司祭を連れて行って，そこに跪き，心からの敬虔と改悛の思いをこめて，昨日働いた不貞を告解し，事の次第を話しました。司祭は罪の償いとして，立ち上がる前に，その場で天使祝詞を五回唱えさせました。騎士は，それでは軽すぎる，断食させてくれ，と言いました。司祭は言いました。「騎士殿，私はあなたの医師です。この件については私の方がよく知っております。」というのは，およそ聴罪司祭たるもの，贖罪を課するに当たり，本人とその改悛と，そしてあとでそれを本人に知らせるべき時を考慮せねばならないのです。騎士は言いました。「司祭様，帰って，朝食にいたしましょう。」家へ帰ると，食事の用意ができていました。騎士は言いました。「家内はどこにいる。」給仕女は言いました。「お休みになっておられます。昨夜は安眠できなかったとかで。」騎士は言いました。「食事にしてくれ。」二人が食卓につくと，妻は目を覚まして起き上がり，食事をしている広間に入って行きました。そし

て，夫の姿を見ると，その首にすがりつきました。夫は言いました。「おいおい，何をするんだ。貴いお方の前で恥ずかしくないのか。」妻は言いました。「あなたがここにいるのを見て，とても嬉しい。夢を見たのよ。あなたがあんなに怪我をして木の下に倒れていると，お医者さんが来て，傷口に五つのばらの花を置いたの。すると，傷口はすぐに跡形もなく治ったのよ。」

こういうわけで，この世での小さい贖罪の方が，あの世での大きい贖罪よりもはるかに褒めたたえられるべきです。また，贖罪は自分でしなければいけません。

第二百八十七話　冗談
夫の代わりに天国へ入れてもらった妻のこと

ある時ひとりの男がおりました。この男は告解を終えて帰宅しましたが，たいへん暗い顔をして，憂鬱そうでした。男の妻が言いました。「あなた，どうしてそんなに暗い顔をしているんですか。」男は言いました。「私は告解してきたのだよ。すると聴罪司祭様が私に何日間も断食し，祈るよう申し渡されたのだ。」妻は言いました。「まあ，あなた，元気を出してください。私があなたの代わりにその贖罪をひきうけましょう。」男は妻に贖罪のしかたを教えました。妻はその贖罪をひきうけ，夫の代わりをしました。かなり経っても妻は夫の代わりを止めませんので，主なる神はその男の考え違いを正してやろうとなさいました。男はある時夢を見ました。自分と妻は死んで，天国にいたり，なかへ入ろうとしている夢です。聖ペトロがやって来て，門を開けましたが，男が天国に第一歩を踏み入れますと，聖ペトロは男を押し戻して，こう言いました。「お前ははいっちゃ駄目だ。お前の代わりに贖罪を行い，いまも行っているのはお前の女房だ。だからお前じゃなく，お前の女房に褒美を与え，お前の女房を天国に入れてやる。」この夢を見ると，男は妻に，自分の贖罪は自分でする，自分も天国へ行きたい，と言いました。「私は，お前が私の代わりに天国へ行くのを望まない。そんなことになれば，私はここに取り残されることになるから。」肝に銘じておきなさい。

第二百八十八話　冗談
母親を神々のもとに遣わした若鳶のこと

一羽の若鳥，鶏の雛を食べさせてもらっている鳶がいました。その鳶が病気にかかり，死ぬのではと不安になりました。そこで鳶は母親にこう言いました。「おかあさん，神様方のところへ行ってください。神様方はいま集まって，相談なさっています。神様方が私の命を永らえてくださるよう，お願いしてください。」母親は言いました。「お前，私が行っても無駄で，お前の命を永らえてもらうことはできないと思うよ。なぜかって。お前は病気になるまえ，子牛や羊が生贄に捧げられ，祭壇に並べておかれたとき，神様方から林檎を盗み，奪ったからだ。生贄が分けてもらえないと，それを汚し，その上にふんを落としたからだ。そうしたことをできれば今でもやりたいくせに，病気だからできないその今になって，お前は神様方の手に落ち，罰せられることを恐れている。だからお前の改悛の情だの，贖罪だのは本心からのものではなく，苦痛への恐怖に由来している。」

同様に，死の床につくか，死にかかってから，後悔し，善をなす人々が大勢います。死ぬ心配がなくなれば，改悛の情もなくなります。泥棒は盗んだことも悔やんでいましょうが，本当は縛り首になるのが怖いのであって，それ以外の何物でもありません。人間は子供にも似た本心から悔い改めるべきであって，下僕としての恐怖心から悔い改めるべきではないのです。「はい，そうなんです。もし私が死に際にダビデの言葉をかりて，「2. Reg. 12. Peccavi（われ罪を犯せり。列王記　下　第十二章）[1] 私は罪を犯しました，という言葉を口にしさえすれば，私は救われるのです」と言う人が何人もいます。救われるためには，上の言葉以外のものが必要なのです。償いはどこにあるのか，告解はどこにあるのか，悔い改めはどこにあるのか，贖罪はどこでするのか，が問題になるのです。学者たち，ジェルソン[2]や他の者たちの例を見なさい。

1　当該箇所にそれらしい言葉はなく，サムエル記　下　第12章第13節に次の言葉がある。

「ダヴィデはナタンに言った。『私は主に罪を犯した。』」

2　Jean Charlier Gerson (1363-1429). フランスの神秘主義者。

第二百八十九話　冗談
郭公が五度鳴いたこと

ある老婆が病気になりました。人々はその老婆に，万一の場合にそなえて，告解と贖罪に行くように勧めました。老婆は言いました。「私には，自分が今度の病気で死なないことがよくわかってます。」人々は老婆に，どうしてそんなことがわかるのか，と尋ねました。老婆は言いました。「私が以前森のなかを歩いていますと，郭公が五度も鳴いたんですが，私は五年たってもまだ生きています。」しかし老婆は翌日には死んでいました。自分がまだどれくらい生きられるか，神様は郭公にお教えになるはずだと思うなんて，この老婆は救いようのない馬鹿です。神様はその愛する身内，ダヴィデが次のようにお願いしても，それをダヴィデにお教えにはならなかったのです。Psal. 38. Notum fac mihi finem（私に最期を教えよ。詩篇　第三十八章）[1]「主よ，私の最期を教えてください，私に何が必要かを知るために。」

第二百九十話　冗談
猟師を見落とした鷲のこと

ある時沢山の鳥が集まり，各々自分が備えている長所や才能を自慢しました。鷲が言いました。「お前たち，目の見えない哀れな鳥たちよ，私の視力はお前たちの誰よりも上だ。私はお前たちには地上のものが見えないほど高く飛ぶことができるが，それでも自分の獲物を見つけてみせる。それを証明してみせよう，誰か私の背に乗れ。」みそさざい，またの名をみそさんざいという鳥が鷲の背に乗りました。そこで鷲はできるだけ空高く舞い上がり，背に乗っているみそさざいに言いました。「地上に何か見えるか。」みそさざいは答えました。「何も見えません。」鷲は言いました。「私には獲物が，羊が一頭見える，しかも羊の四肢胴体がはっきり見えるのだ。それ

1　詩編　第39章第5節に次の言葉がある。
「教えてください，主よ，わたしの行く末を
わたしの生涯はどれ程のものか
いかにわたしがはかないものか，悟るように。」

が嘘でないことを証明するために，すぐさま羊を襲い，お腹を充たすとしよう。無能なお前はすきっ腹を抱えているがいい。」そして獲物のうえに降り，食べようとしました。するとそこには猟師がいて，罠を仕掛けていましたので，鷲は捕まりました。一方みそさざいは垣根の棒のうえにとまって見ていましたが，鷲を嘲笑して言いました。「ご自慢のあの抜群の視力はどこへ行ったんですか。それとも，大馬鹿野郎のあんたには羊の体内の血管は一本一本見えても，大柄な猟師や網は見えなかったんですか。これじゃ，あんたの目よりも私や仲間の目のほうがいいじゃないですか。お気の毒にも，あんたの命はここまでですよ。」

同様に，宗教的見地からは大馬鹿者なのに，世俗的にはとびきりのお利口者が沢山います。連中は虱に靴をはかせるような目をもちながら，この世で自分たちを誘惑し，大きな罪にまきこむ大柄な悪魔が目に入らず，罪を免れるために，贖罪を学ぼうともしないのです。

第二百九十一話　冗談
あらゆる物を運ばねばならない老いぼれ馬のこと

一人の粉挽きがいました。粉挽きは粉挽場へ袋を運ぶ四頭の小馬を飼っていました。それぞれ「栗毛」「黒毛」「白毛」「灰毛」と呼ばれていました。粉挽きはその中の三頭の馬を働かせるのを惜しみ，四番目の馬をいつも使いました。四番目の馬が全ての荷物を運ばなければならなかったので，そのために倒れて死んでしまいました。

粉挽きは，四頭の馬，つまり四つの年代を持つすべての人を意味します。二十才までの子供時代，四十才までの青年期，六十才までの壮年期，そして死ぬまでの老年期，その老年期が灰毛の馬です。今数えられているようなそれぞれの時代には，贖罪と，そして人が神に如何に仕えるべきかという規律とがあるのです。しかるに我々は，青年期には身体を使うことを惜しみ，年老いた身体にその全てを積もうと願うのです。髪がある場合には，頭が白くなってからです。灰毛の馬のことを私は言っているのです。「ええ，私は年をとったら，神にお仕えしようと思っています。」でもどんな人も，老年になるまで善行を惜しむべきではありません。というのは，老年になってからでは贖罪には適さないからです。そう，断食しようとすれば，

夜眠ることが出来ないし，お祈りをしようとすれば，その間に眠り込んでしまいます。口が乾きます。お祈りをしようと思えば，傍らにワインの入った瓶が必要でしょう。年を取って気力が衰えます。年を取れば取るほど益々気力がなくなります。酔うか，怠けるか，生気がないか，元気がないかです。我々老人は，素面ならば元気がないし，酩酊すれば怠けてテーブルの上に眠り込んでしまいます。遅くならないうちにその事に心を向けなさい。

第二百九十二話　まじめ
父親に白髪を見つけた子供のこと

ある村に一人の百姓がおり，子供が沢山いました。その百姓が罪を犯し，それも長い間続けました。百姓には女の子が一人いました。ある時その女の子が椅子に登り，櫛で父親の頭に虱を探そうと思い，実際またそうしました。そうやって虱を探していた時，女の子は白髪を見つけて言いました。「お父さん，白髪があるよ。」百姓は言いました。「白髪を抜いてくれ。」女の子は，父親から白髪を一本抜きました。百姓はそれを手に取って言いました。「ああ，永遠なる神よ。私が白髪まじりになる時であるならば，まことに私は悔い改めるべき時である。」かくして百姓は行状を改め，一本の白髪のために己の罪を悔い改めました。

かなり多くの者は，頭に髪がふさふさしていますが，子供の時とは違って，老人にならないうちに白くなります。でもその時には，まだ心を入れ替えはしないのです。彼等は慣れ親しんできたやり方を続けます。そうです，言われるところによれば，智慧は歳月を経るとやって来るものではないのです。歳月も馬鹿にとっては役にたたないのです。私は多くの年老いた馬鹿を見てきましたし，多くの若い賢者も見てきました。多くの若い馬鹿も，多くの年老いた賢者も見てきました。でも悪魔は年寄りの馬鹿は大嫌いなのです。

第二十九章　懺悔について

第二百九十三話　冗談
毛皮の服をなくした平修道女のこと

シュトラースブルクには沢山の平修道女がおり，平修道女たちは通常マントをまとい，その下に毛皮の服を着ています。ある時一人の平修道女が，跣足修道士のところから家へ帰ろうとすると，一人の名家の婦人と出会いました。その婦人もミサに参列しようと思ったのでした。ちょうど待降節でした。その婦人は平修道女に言いました。「修道女さま，あなたはどちらからいらっしゃいましたか。」平修道女は言いました。「聴罪司祭の所から参りました。懺悔をして参りました。本当に楽になりました。」平修道女が家へ帰ってみると，毛皮の服が無くなっていました。毛皮の服はマントの下で脱げて無くなってしまっていたのです。それで平修道女はとても楽になっていたのでした。

第二百九十四話　冗談
「私は頭巾だけは被っていました」と言ったこと

ある時，一人の娘がこんなふうに懺悔をしました。「司祭さま，私はある立派な司祭さまの傍らで横になりました。」聴罪司祭は言いました。「あなたは裸で司祭の傍らに横になったのですか。」娘は言いました。「いいえ，私は頭巾を被っていました。」

第二百九十五話　冗談
キリストの生誕以来懺悔している男のこと

ある時，一人の男がこんなふうに懺悔をしました。「司祭さま，キリストがお生まれになってから今までに，私が行ったあらゆる罪を告白します。」聴罪司祭は言いました。「一体全体お前はそんなに年を取っているのか。」男は言いました。「はい，でも私には兄があって，兄の方がさらに二才年上なんです。」

第二百九十六話　冗談
ベッドでの夜尿（おねしょ）を懺悔した少女のこと

幼い子供たちが懺悔に慣れてきた時のこと，一人の女の子が司祭の所へやって来て，懺悔をしました。聴罪司祭がその子に，彼女もベッドで夜尿したかどうか尋ねました。その子は，「しました」と答えました。聴罪司祭は言いました。「そんなことをもうしないように注意しなさいよ。ベッドで夜尿するような子供は食べてしまうよ。」女の子は言いました。「いや，私がベッドで夜尿するからと言って，私を食べないで下さい。私には弟がありますが，弟はベッドでウンチをします。弟を食べて下さい。」

第二百九十七話　冗談
七感を必要とした村長のこと

ある時一人の百姓がこんなふうに懺悔をしました。「司祭さま，私は私の七感の罪を告白します。」聴罪司祭は言いました。「でもそれは五感の間違いじゃあないのかね。」百姓は言いました。「いいえ，司祭さま，私は村長です。だから他の人よりも二感多く必要なんです。」

第二百九十八話　冗談
四グルデンを見せることを望んだ男のこと

ある時なめし皮工が，私は人を殴り殺そうと思いましたが，それを実行はしませんでした，と告白しました。聴罪司祭は言いました。「お前は人を殴り殺したかどで，ローマへ行くか，免罪のために私に四グルデンを支払うかしなければいけない。私は四十人分に対しては法王と同じ力があるから，お前はそうする必要があるのだ。」なめし皮工は言いました。「でも殴り殺してはいません。ただ頭の中で考えただけなんです。」聴罪司祭は言いました。「神は意志を行為と見なされるのだ。」なめし皮工は言いました。「他に方法がなければ，あなたに四グルデンを払います。罪を許して下さい。」こうして司祭はなめし皮工を免罪にしました。そこでなめし皮工は司祭に告解料を（頭の中で）支払いました。聴罪司祭は言いました。「四グルデンはどこにあるのか。」なめし皮工は言いました。「意志を行為と見なして下さ

い。私はあなたに四グルデンを差し上げることを，頭の中で考えました。」

第二百九十九話　冗談
帳面で告解をしようとした男のこと

ある時男がひとり，告解を帳面に書いて，司祭のところへやって来て，こう言いました。「司祭様，私は物覚えがわるく，そのうえ吃りなんで。そこで貴方様にお願いですが，私の告解と罪をこの帳面で読んでくだされ。私も聞いてますだ。」司祭は読むのに二時間か三時間はかかると見てとりました。一方そこには大勢の人がいて，告解の順番を待っていました。聴罪司祭は言いました。「いま私には読んでいる暇がありません。復活祭のあとで来なさい。そうしたら読みましょう。今日のところは一番大きいのだけを言ってみなさい。」男はそうしました。司祭はその男に免罪を申しわたして，言いました。「私はこの帳面に書いてあるお前のすべての罪を免じます。はい，帰ってよろしい。」男は言いました。「司祭様，私に罰をくださらないんで。」聴罪司祭は言いました。「あげません。」男は言いました。「司祭様，私は罰がいただきたいんで。」司祭は言いました。「それでは罰として，お前は一ヵ月間この帳面を毎日三回声をだして読みなさい。」男は言いました。「司祭様，そんな罰はきつすぎますだ。」司祭は言いました。「お前自身がその帳面を読めないのに，私がそれを読みたいわけがなかろうに。」

それ故，告解のために備忘メモをつくるのは結構ですが，本人だけにしかわからない文字，記号を作って書くべきです。しかし洗いざらい告解をする尼僧のように，告解を帳面に書いたり，告解のときにその帳面を読んだりしてはいけません。

第三百話　冗談
Confiteor（私は告白します）にたいしては，Misereatur（人の身にもなってください）と言うこと

前話の男は，司祭がMisereatur（人の身にもなってください）と言うと同時に免罪を申し渡されましたが，こういうときはそう言うべきです。長靴をはいた学者[1]や着飾った俗人，そのうえ生半可に学問をかじった連中が

1　「似非学者」のこと。本訳（3）229頁参照。

やって来て，司祭とともに祭壇にあがって，Confiteor（私は告白します）を唱え，凡そ二十人から三十人の聖人の名前を順々に挙げます。「Beatum Petrum, beatum Paulum, beatum Andream, beatum Nicolaum, beatum Ambrosium, beatum Sebastianum, beatum Onofrium, beatam Magdalenam, beatam Barbaram, beatam Katharinam etc. Istos sanctos et sanctas Dei et vos sacerdotes orate pro me miserrimo peccatore.（祝福せられたるペトルス様，パウルス様，アンドレアス様，ニコラウス様，アムブロジウス様，セバスチアヌス様，オノフリウス様，マグダレーナ様，バルバラ様，カタリーナ様…。主の聖人，聖女の皆様がた，そして司祭の皆様がた，私という最も不幸な罪人のために祈ってください。）」一方あわれな司祭は阿呆のように立ちつくし，その間使徒書簡が読めるなら読みたいところです。こうした馬鹿者どもがやって来るとき，司祭はこのConfiteor（私は告白します）という言葉にたいしてはMisereatur（私の身にもなってください）と言うべきです。「Misereatur tui Circumcisio Domini et perducat te per totum kalendarium usque ad festum Sancti Silvestri in vitam eternam! Amen.（主の割礼〈一月一日〉がお前を憐れみ，聖ジルベスタ祭〈十二月三十一日〉迄の年間を通して，お前を永遠の生命のなかへ連れて行かんことを祈る。アーメン。」

第三百一話　冗談
将来犯すであろう罪を免ずる男のこと

ある男が偽の免罪とその書状をもってドイツへやって来て，告解を聞き，人々が将来犯すであろう罪を免じ，多額の金銭をまきあげました。一人の貴族がその男のところへやって来て，自分が将来犯すつもりの罪を免じてくれと頼みました。その使節は貴族に三クローネを要求しました。貴族はそれを使節に与えました。使節は貴族の罪を免じました。その使節が，金は充分集めたし，偽者であることがばれてはと思って，国外へ出ようとし，ある伯爵の領地に入りますと，前述の貴族が使節を身ぐるみはぎました。そこで使節は伯爵に訴え出ました。伯爵はその貴族を呼び寄せて，お前は使節から金品を奪ったか，と尋ねました。貴族は言いました。「はい，

あの男は大勢の人々をだまし，将来犯すであろう罪を免じました。私にもそうしました。私は自分が犯すつもりの罪を赦してもらうために，あの男に三クローネ手渡しました。ここにその免罪符があります。そして私が犯すつもりだった罪とはこのことだったのです。」伯爵は使節に，ことの次第はそのとおりか，と尋ねました。使節はそれを否定することはできませんでした。そこで伯爵は言いました。「さっさとこの国から出て行け。さもなければ，お前を水のなかへ投げ込ませるぞ。あの男がお前にしたことは正しい。」こうして伯爵も分け前にあずかり，この訴訟は一件落着となりました。

第三百二話　まじめ
絞首刑に処せられた聴罪司祭のこと

そう昔のことではありませんが，イタリアのある町でたまたまある男が浮気にでかけ，とある家の戸口に立っていました。そこへ別の男がやって来て，誰何（すいか）しました。すると前者は剣を抜いて後者を刺し，逃げ去って，怪我人は放置されました。その後誰もそれをしたのは自分だと名乗って出ませんでした。町長は，殺人犯の名を言う者には二百グルデン与えよう，と公示させました。この状態が四旬節まで続きました。四旬節には誰もが告解をしなければなりません。そこで例の犯人はある聴罪司祭を選び，自分の殺人行為を告解しましたが，司祭には自分が誰かわかるまい，と思っていました。その聴罪司祭も欲のふかい奴で，町長のところへやって来て，こう言いました。「町長さん，約束のお金を下さるなら，例の人殺しをやった奴の名を言いましょう。」町長は，よろしい，お金は出そうと，言いました。そこで司祭は犯人の名を言いました。町長は司祭を留め置かせて，司祭が密告した男を呼び寄せました。男はやって来ました。町長がその男に言いました。「お前があの男を刺したんだな。」その男ははげしく否定しました。そこで町長は言いました。「お前がその件を告解した司祭のところへ行こう。」男は，聴罪司祭のところへ連れて来られると，もうその件を否定することはできませんでした。そこで町長は言いました。「このことは神の道，即ち告解によって私の知るところとなったのだから，私はお前を裁くつもりはない。六時間の猶予をやる。やるべきことをやって，この土地か

ら出ていけ。」男はそうしました。その後で町長は町に絞首台といっても，一本の木を往来をまたいで家から家へわたしだだけの絞首台をつくり，そこへ例の司祭を吊るさせました。そして司祭であることをはっきりさせるため，頭が坊主に剃られました。それが彼の告解料，二百グルデンだったのです。

聴罪司祭がたは，この話で告解の内容を他言せぬことを学びなさい。